

ダレカノスミカ

誰かの住処

櫓凜

まえがき

明日は何が僕を待っているのだろう。

いつもと同じ道、いつもと同じ仕事、いつもと同じ帰り道。

きっと、いつもと同じで、何か楽しい事が起こるのだろう。

いつもと変わらない僕が奏でる出来事。

何かを感じてくれたら嬉しく思う。

いつものように...

「ガチャガチャ」

キーボックスの鍵を開け、鍵を取り出し風除室のドアを開けた。

ガラスの風除室、壁の1面は赤いレンガ調の外壁になっていた。

玄関ドアの横のガラス。腰の高さで割られていた。

サムターン回しにあったのだろうか。

玄関は鍵の開いている状態で、少し重たいが力を入れると直ぐに開く状態だった。

不動産会社は風除室の鍵だけ閉めて、中はどうでも良かったのだろう。

きっと僕もそうするだろう。

ドアを開けると、真冬の太陽の光を浴びた風除室よりも冷たい空気が僕の肌に流れてきた。

玄関ドアの件だけではない、パッと見て色々と違和感を感じた僕は、不動産会社に直ぐに連絡を入れた。

「この家...大丈夫ですか？」

「大丈夫って何がですか？」

「いえ、大丈夫なら良いのです、解りましたこれから検査入りますので、よろしくお願ひします」

車と住宅の4メートルの間、膝程まで積もった雪。

小さな歩幅で道を作りながら何往復か道筋を確保しつつ、検査道具を玄関に置いた。

人が歩く所に道が出来る。

そんなことをふと考えながら、一箇所だけ無駄に膝程の雪を残しながら。

探索...

あまり時間は無いのは解っていたが、既存の図面が無いので少し住宅の中を探索する事とした。

外日の入る玄関で、踝までのショートブーツを脱ぎ、後ろを気にしながら靴を揃え、一息ついてリビングに足を踏み入れた。

ふう。

そこは、キッチンと一体となったリビングで、その他に連続した和室が2部屋、襖が開いている状態だった。

色褪せた緑色のカーテンは閉まっており、下側から光が差し込み、カーペットの汚れを照らしていた。

タンスは無造作に開かれており、小物入れの引き出しは床に乱雑に置かれていた。

何が起きたのだろう。。

僕は段々と何か不安を感じていた。

角のクロスは、下部がボロボロで、2メートル程度のキャットウォークが置かれている。

ネコがいたのだろう。。

「クシュン」

襖で仕切られた、2連の和室。

貴族の服をきた年配の夫婦の写真が無造作に床に置かれていた。

少し写真を避けると畳には、少量の血の跡が残っていた。

僕はそおっと、写真を戻し見ないふり。

壁はじゅらく風のビニールクロスが貼られており、中に水分が入り込んだのか、ノリが弱かったのか、ダボダボと浮いている状態だった。

ビニールクロスを触る僕を、老夫婦はジッと見続けていた。

蛇に睨まれた蛙...そんな事にはならなかったが、少し嫌だった。

床の間には、宇宙人が書いたような掛け軸が掛けられており、床の間の横の押入れの棚には、布団が置かれており、床には金庫が置かれていた。

金庫は足で押すと動くような軽いもので、空っぽな事が容易に想像出来た。

倫理に反しているようだが、足で押したのは何か問題があった際に指紋が着くのが何と無く嫌だったからだ。

そして、軍手を履いていなかったのは、少し前にビニールクロスのダボダボを素手で触ったからだ。

インスペクター失格である。

水回り

6畳、8畳の和室の老夫婦に別れを告げ、次はキッチンへ足を踏み入れた。
2550mmのキッチン、普通のサイズのキッチンだ。
シンクには、ワラジ虫や小さなゲジゲジの様な虫が数匹死んでいた。
横の棚には、ねずみ捕り。

(気持ち悪い)

僕は心の中で思った。

それは、虫や動物が出る事が気持ち悪いのでは無い。
ここで生活していた人を考えると、段々と胃の中がムカムカして来ているのだ。

キッチン横のUT、パントリーの様な生ゴミの入った袋が数個置いてある物置繋がっている。
UTには、トイレとユニットバスのドアがあった。

粉状の洗剤が床にバラまかれていた。
猫の仕業だろうか。

ユニットバスはどうやら最近新しくしている様だ。
虫は死んでいたが、比較的新しい物だった。

この住宅に入って1番居心地の良い空間だった。

たった30分程度しか経過していなかったが、暫くお風呂に入っていない錯覚に陥っていた。
ここのお風呂は嫌だが、お風呂に入りたい。

きっと、今お風呂に浸かったらそのまま寝れるだろう。
なんだか凄く疲れが溜まっていた。

僕は人が恋しくなってきた。

階段

ギーギー。

日の当たる階段を、音を立てながら僕は2階へ上がった。
残りの3段回り部分が、少し傾斜のついている様だった。

わかる人であれば、2/1000程度の傾斜があれば違和感を感じるらしい。

僕の踏んだ段板は、5/1000程度だろうか？

感性を磨かなければ行けない。

昔、設計事務所の師匠に感性の話しをされた事があった。

「大昔から比べて、人の感性は下がって行く一方なんだよ。この情報化社会、感性を磨く事の方が難しい。

感性で仕事をしたら駄目だよ。一つ一つの理屈で勝負するのがこれからの時代だよ。

僕が、ヨーロッパで生まれていたら建築家なんか到底なれなかったなあ。」

「僕が、ヨーロッパで生まれていたら建築家なんか到底なれなかったなあ。」

この言葉当時は何度も口にしていた。

僕もたまに使ってしまう。

「僕が大工さんだったら、こんな傾斜のついた階段作らなかったなあ。」

ボソッと書いた。

階段は、悪の組織の黒い手下の様に

「ギー」と返事をしてくれた。

子供室

階段を上り、2階に足を踏み入れた。

どうやら3室で構成されているらしい。
廊下の左手の部屋へ先ずは入ってみた。

時間が止まっているようだ...
机の上にはやりかけのジグソーパズル。
鏡の裏にはスーパーファミコンのカセットが何個かあった。
押入れの中には、書道道具。
壁掛けの時計は9時27分で止まっているようだ。

クニナ、、

何と無くそう唱えた。

数字を覚える時の癖になっていた。

ふと腕時計を見た。

今は...イイシロだった。

腹時計がグウっとなった。